

100周年かわら版 別冊

歴史に**学び**、
歴史を**創る**。

東京医科大学
歴史読本

 学校法人東京医科大学

連載企画

歴史に学び、歴史を創る。

「東京医学専門学校」のさらに前身である「東京医学講習所」が開設される際、帽章が必要となり、当時の学生団が皆で持ち寄った案の中から、吉沢眺君らが「打って一丸となす」の意を込めて提案した「醫」の字の下の方を尖らせて弾丸型にした案に全員が賛成し、帽章が出来上がりました。それが後に校章になったという、まさに「自主自学」の建学の精神が「形」になったものです。

そして、現在では、校章がハート型にも見えることから「心のこもった医療の提供」を目指し、邁進していくようメッセージが込められています。

(出典：「東京医科大学報」昭和50年10月号)

第1章 校章が持つ意味

東京医大の校章、実は建学当時の学生が考えた帽章が由来というのをご存知ですか？



創立60周年記念に制定された現在の校章

連載企画

歴史に学び、歴史を創る。

第2章 第一校舎がくれたもの

4月から京王線新宿駅に掲出される駅広告にもその写真が使われている「第一校舎」は、昭和4年に建てられ、90年近く経った今も利用されている本学の歴史と伝統のシンボルとも言える建物です。そんな第一校舎が、本学が昭和21年に大学昇格する際、非常に重要な鍵を握っていたことをご存知ですか？

昭和初期に二度の火災により焼失した建物の復興計画として昭和4年に建てられた第一校舎は、火災に強い鉄筋コンクリート造だったため第二次世界大戦中、東京大空襲の際に防空壕としての役割を果たしました。ここに教職員・学生らが顕微鏡や図書等を避難させ、戦火を逃れたことにより、戦後、図書館を設置することができたのです。これにより戦災を耐え抜いた第一校舎と、図書館に集約された1万冊以上の蔵書が、大学昇格の条件を満たす設備と判定され、大学昇格の認可を得たのでした。つまり「第一校舎」のおかげで今の東京医科大学がある、と言っても過言ではないのです。

連載企画

歴史に学び、歴史を創る。

第3章

4月13日 99年目の創立記念日を迎えて

～100年の奇蹟を語り継ぎ、未来へ～

1916

東京医学講習所



全私財を投じて建学を全面的に支援した学祖

高橋 琢也

建学の立役者



第一校舎前学祖77歳の喜寿の記念として寿像

初代理事長

(大正7年4月～昭和10年1月)

1918

東京医学専門学校

教学の立役者



順天堂医院を臨床実習の場として提供(順天堂医院長 佐藤進の嗣子)

佐藤 達次郎

第一校舎階段踊り場

初代校長

(大正7年4月～昭和18年11月)

二代理事長

(昭和10年2月～昭和18年11月)

1946

東京医科大学



戦火を乗り越え、大学に昇格

緒方 知三郎



教育研究棟(自主自学館)1階入口

二代校長(初代学長)

(昭和18年12月～昭和27年5月)

三代理事長

(昭和18年12月～昭和27年3月)

銅像として今も私たちが見守り続けている、

東京医大の偉人たち

東医を創った男たち

創学当時の学生団本部長



後藤 哲雄



中村 丈夫



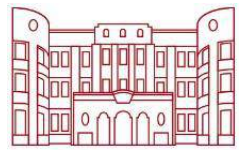
中本 富太郎



長 委三美

建学の礎

約百年前、日本医専を同盟退学した学生団は日本医専から教室を封鎖されたため、寄席、演芸館等の会場に集合して団結をはかりながら、新校設立のため保証人になつてもらうべく有識者・有力者をあたりました。そんな中、広島県出身の学生、長委三美君や藤中正君らが同郷の有力者をあつていく中で同じく広島県出身の高橋学祖に辿り着き、学生団の窮状を訴えたことで高橋学祖の全面的な支援を得ることとなったのです。そして、長く官界にあった高橋学祖の尽力で各界の有力者の支援へとつながり、東京医学講習所の設立が実現したのでした。



これまで、この「歴史に学び、歴史を創る。」の連載企画では、建学に関わる「大学」の歴史に焦点を当ててきました。5月は、昭和6年(1931)5月10日 附属淀橋診療所が開設されたり、昭和21年(1946)5月15日 東京医科大学設置が認可され、淀橋病院が東京医科大学病院に改称されたりと、ちょうど大学病院の歴史が大きく動いた月。

平成28年(2016)は、大学創立100周年というだけでなく、淀橋病院としては**85周年**、東京医科大学病院としては**70周年**の節目の年ということで、今月号から「大学病院」に焦点を当て、「**大学病院のルーツ**」を紹介していきます。

その後、茨城・八王子のルーツも順次、紐解いていく予定です。

大学が新宿にできた理由

東京医科大学が都心・新宿という好立地にあるのは、あらゆる面において、医科大学として大きな強みになっていますが、そもそもなぜ、大学が新宿にできたのかみなさんご存知ですか？

日本医学専門学校(現 日本医科大学)を総退学し、理想とする医学校を自らの手で作り上げようとした学生たち。当然、その時点では土地も建物もありませんでした。学祖高橋琢也先生の支援を受け、大正5年(1916)9月11日、神楽坂にあった東京物理学校(現 東京理科大学)内に間借りして東京医学講習所を開設したのが、東京医科大学の始まりです。

臨床実習においても、御茶の水にある順天堂医院を外科研修病院として間借りしており、そうした場所から近く**都心で、大学として利用できる広大な土地を探し求めた結果、折り良くその条件にあう適度な面積の土地が、現在新宿キャンパスのある東大久保(※1)に見つかったのです。**その取得にあたり、高橋学祖が全私財を投入し、学祖と学生団が全国を奔走して資金調達活動を行った末、大正6年土地の購入にこぎつめたのでした。そうして翌年の大正7年4月、東京医学専門学校の設置が認可されたのでした。

博 濟 病 院 本 館
＜大正13年6月落成＞
(現新宿キャンパス)



この博濟病院の正門柱、見覚えがありませんか？

実はこの柱だけ長年の風雪に耐えて、東京大空襲をも乗り越え、新宿キャンパスの正門として、今も本学を見守り続けているのです！



100周年
さんかく娘♪

運命を変えた、二度の病院火災

大正7年5月、当時内科研修病院として間借りしていた、麴町にある回生病院(※2)の建物を買収して東大久保の地に移築し、附属病院として「博濟病院(はくさいびょういん)」(※3)を開院しました。

次いで大正9年、解剖学、生理学、医化学などの基礎教室を設置し、さらに大正13年には附属病院本館も完成し、ようやく「医学専門学校の形」が整ったのも束の間、本学は二度の火災という不運に見舞われました。

昭和3年3月、博濟病院の入院病棟と基礎教室の大半が焼失、さらには、牛込にある戸山脳病院(昭和2年9月に買収)も昭和4年2月に全焼してしまったのです。その後、火災に耐える設備として、鉄筋コンクリート造の施設の建築が求められ、同年10月に第一校舎が落成したのでした。

その後、大学昇格運動の一環として、**火災により焼失した附属病院に替わる建物を速やかに取得する必要があったものの、東大久保の土地ではそれ以上発展の余地がないとして、病院は他の土地に転出すべきだとの論議が交わされた結果、**大学病院は大学とは離れた土地に作られることになり、昭和6年5月、西新宿に附属淀橋診療所が開設されたのでした。

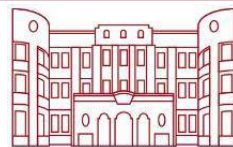
淀 橋 診 療 所
＜昭和6年5月開設＞
(現西新宿キャンパス)



※1 東大久保:昭和53年に地名消滅。店舗名・マンション名などに名を残す

※2 中濱東一郎氏(ジョン万次郎の長男。本学内科学教授、初代顧問)が経営

※3 佐藤進男爵(順天堂第三代堂主。本学初代顧問)が命名



第4章では、なぜ大学と大学病院が離れているのか、その理由に焦点をあてました。第5章では大学と離れた土地の中でも、なぜ今の西新宿の土地が選ばれたのか、その理由に迫ります。

昭和初期の新宿界隈

昭和4年(1929)当時、東京医専のある新宿界隈は、東口には三越や「ほていや」(今の伊勢丹)、中村屋、高野、さらには、今の100円SHOPにあたる「十銭ストア」などたくさんの店が立ち並びかなり開けて賑わっていました。



昭和8年頃の新宿駅東口方面
(写真提供:新宿歴史博物館)

一方、西口には広大な土地に淀橋浄水場が作られていたため、商業的には未発達な土地でした。

そんな中、大学がある東大久保の土地から遠すぎない場所で、新病院建設用地として広大な土地を探していた本学は、淀橋区柏木町にあり、大通りに面した完全に長方形で、2,265坪もある広大な土地に行き当たり、これを買収するに至りました。そして、この土地を買収することができたのはまさに“人と人とのつながり”ゆえだったのです。

人と人とのつながりが時代を切り拓く

当時眼科助教授(後の理事長)だった馬詰嘉吉先生が、その土地の所有者の娘婿と友人関係にあったため、交渉するにあたり協力を得ることができたのです。その娘婿の父親が本学の同窓だったことも無関係ではなかったのではないのでしょうか。交渉の結果、その買収額は20万円のところ、最終的に2万円は本学への寄付という形になり、18万円の支払いで妥結したのでした。(当時の教員初任給:50円)

こうして西新宿に土地を得た本学は、もともとあった家屋を利用して昭和6年5月「淀橋診療所」として附属病院を開院。翌年「淀橋病院」と改称、昭和21年5月に東京医科大学の設立が認可された際に「東京医科大学病院」へと改称され今に至ります。2千数坪だった土地はその後少しずつ拡大して1万坪余になり、今の基幹病院が完成していったのです。

今の西新宿に大学病院を開院できたことを抜きには、本学の発展は語れません。時代を切り拓く鍵は、いつも人の「縁」だと改めて実感するお話ですね。



*ちなみに…淀橋病院が建設された当時、そのすぐ裏に広がっていた淀橋浄水場は、昭和40年(1965)にその機能が東村山に移管されて閉鎖となりました。その跡地は再開発により、昭和46年(1971)、47階建ての超高層ビル「京王プラザホテル」が、昭和49年(1974)、「新宿住友ビル」、「新宿三井ビル」などの高層ビルが次々と建てられました。現在では「淀橋」の名前は「ヨドバシカメラ」や「淀橋第四小学校」などに名を残すのみとなっています。

99年前の今日、本学の源流である
「東京医学講習所」が開講しました。



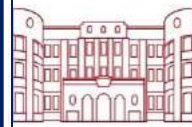
本日開講

大正5年9月11日
(1916)

東京医学講習所

みなさん、
ご存じでしたか？

100周年かわら版



2015
(平成27年)

号外

発行:東京医科大学創立
100周年事業広報委員会

事務局:法人経営企画・広報室

☎03-3351-6141(内線298)

✉keiei@tokyo-med.ac.jp

東京医学講習所 開講



血判状の盟約により同盟退学した約450名の学生団が奮闘の半年を乗り越え、東京物理学校(現東京理科大学)の教室を借り、東京医学講習所の開講に漕ぎつけたのが、99年前の今日でした。つまり「9月11日」は本学にとって忘れてはならない日なのです。

ゼロからの出発



土地も建物も教員も資金も、何もなしのところから、医学校を創り上げた先人たち。そしてゼロからの建学に70歳を超えてから、全私財を投じ、全国を奔走してくれた学祖高橋琢也先生に、敬意を表します。

自主自学



東京医科大学の建学の精神である「自主自学」。その意味は、自主的に自ら学ぶということだけにとどまらず、自ら学ぶためにその環境を自らの手で創り出す、という深い意味があるのではないのでしょうか。



茨城に附属病院ができた理由

大学を東京新宿の地に持つ本学が、なぜ茨城に附属病院を持つことになったのか。それを紐解くために、まず霞ヶ浦病院ができるまでの歴史に遡る。その敷地には、もともと海軍霞ヶ浦航空隊医務室があった。終戦と共に廃止されたこの建物を茨城県厚生農業協同組合連合会が国より借受け、新治協同病院（現：総合病院土浦協同病院）の「阿見分院」として発足した。

当時、本学では新制医科大学として再発足するために病床数不足が問題となっていた。そのため軍又は国が所有していた土地と建物を入手し、広大な附属病院を設置することを計画しており、都内にも候補となる施設があったのだが入手には至らなかった。そんな中、当時理事長だった緒方知三郎先生が友人を通して阿見分院譲渡の交渉を進め、昭和23年経営は協同病院のまま茨城県知事より認可を受けて開設。その後昭和24年10月、経営・診療共に本学附属の「霞ヶ浦病院」として開院した。

平成21年4月霞ヶ浦病院60周年の記念に「茨城医療センター」と改称され、現在に至る。

霞ヶ浦病院正門
＜昭和24年10月開院＞



茨城医療センター
＜平成27年現在＞



〔参考文献〕

- 東京医科大学霞ヶ浦病院20年の歩み ○写真でとらえる30年
- 東京医科大学五十年史 ○東京医科大学七十年史
- 東京医科大学報60周年記念特別臨時号(昭和51年10月発行)

「高橋記念館」今昔物語

本学の前身である「東京医学専門学校」設立に尽力した学祖高橋琢也先生は、当時住んでいた家も売り払い、まさに全私財を投げ打って資金集めに奔走された。そんな学祖に敬意と感謝をこめて、昭和8年、同窓会を中心とする母校後援会より、米寿の祝として住宅を寄贈しようとしたが学祖はこれを辞退された。そこで代わりに、西新宿の大学病院敷地内に理事長住宅として木造平屋造りの建物を呈上したが、学祖の没後、大学側に返戻されたため、この建物は「高橋記念館」として、学生や教職員の憩いの場として使用された。

高橋記念館
＜昭和56年12月＞
（於 大学病院）



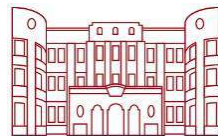
その後、現在の大学病院建設の際、この建物が取り壊されることになったが、その一部は茨城に移設された。これがのちに、院内保育園「ひまわり保育室」として使われるようになったのである。普段何気なく使われている建物にも、そんな歴史があったことを、学祖の尽力を無駄にしないためにも後世に語り継いでいきたい。

高橋記念館
＜昭和57年7月＞
（於 霞ヶ浦病院）



ひまわり保育室
＜平成27年8月現在＞
（於 茨城医療センター）





八王子に附属病院ができた理由

八王子医療センターは、昭和55年(1980)に開設し、今年36周年になる本学三つ目の附属病院である。

当時、本学ではインターン制度廃止後の**卒業教育の充実を図るため、新たな附属病院の建設**が大きな課題となっていた。同じ頃、八王子市は人口36万人を擁しながらも、市内に高度医療技術を有する大病院がなく、この問題を解決するため、**市当局から大学病院との提携により医療供給を行う方針が打ち出され**、医師会等との話し合いの末、本学を含む四大学が候補にあがった。

検討が重ねられた結果、**本学が提携大学として選定され、八王子市と「八王子医療センター建設及び管理運営に関する基本協定」を締結し**、病院の建設に至ったのだった。



「八王子医療センター建設及び管理運営に関する基本協定」締結
＜昭和53年締結＞

八王子医療センター
＜昭和55年4月開院＞



当初は循環器疾患を対象とした地域の救命救急センターとして220床で発足した八王子医療センターは、その後も、**地域のニーズに応えながら、診療科と病床の増設・増床を重ね**、現在では34診療科、610床を誇る総合病院となっている。

八王子医療センター
＜平成26年現在＞



「自主自学記念碑」物語

「自主自学」といえば、本学の建学の精神。八王子医療センターの玄関前広場にその「自主自学」が刻まれた石碑があるのをご存じだろうか。

これは平成11年(1999)に本学同窓会創立80周年の記念に、同窓会より本学に寄贈されたもの。

「**病院の入口にあるこの碑を日々仰いで建学の精神に立ち返り、常に学ぶ姿勢を心に留めるようにしたい**」という当時の職員の言葉を忘れずにいたい。



裏面に刻まれた建学の歴史

撮影協力：八王子医療センター総務課亀ヶ谷さん

〔参考文献〕

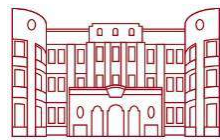
- 東京医科大学七十年史
- 東京医科大学報 129・151・280・377・380号

◇こぼれ話◇記念会館も同窓からの贈り物

大学キャンパスにある、学生や職員が利用する地下食堂や、入学式・卒業式にも使われる屋内運動場兼大講堂のある施設、「**記念会館**」。普段何気なく使っていますが、これも実は、同窓からの贈り物なのです。

本学創立50周年記念事業の一環として、**同窓のみなさんの“後世に残るものを”という熱い意志によって資金が集められて**、昭和41年に建設されたものなんですよ！





看護専門学校の軌跡

昭和32年(1957)4月、当時、大学病院の病床拡充と外来棟の拡張計画にあたって深刻化していた准看護婦不足を解消するため、「東京医科大学病院附属准看護婦学校」が開校した。その後、さらに正看護婦不足を解消するため、東京オリンピックが開催された昭和39年(1964)に「東京医科大学附属高等看護学校」を開校、昭和53年(1978)に専修学校の設置が認可され、「東京医科大学看護専門学校」に改称された。同年、大学敷地内に基礎新館が完成し、昭和54年(1979)7月に大学病院敷地内の校舎から全面移転した。



大学病院敷地内看護専門学校と学生寮



基礎新館

本学が100周年を迎える節目の年である平成28年(2016)、看護専門学校は3月3日(木)の閉校式をもって、その52年間の歴史に幕を下ろす。しかし、これまでに3,850名の優秀な看護師を輩出してきた看護専門学校の功績は計り知れない。現在、東京医科大学病院で働いている看護師の約半数はその卒業生であり、それ以外にも国内外でたくさん卒業生が活躍している。その輝かしい伝統は閉校した後も、平成25年(2013)4月に開設した「医学部看護学科」に引き継がれていくことだろう。

「幻の保健師養成課程」

～医学部看護学科教員 春日広美先生 寄稿～

看護専門学校が開校する前、戦後間もない昭和21年(1946)、本学の中に、保健婦教育を行う「東京保健女子学院」が開校したのをご存じだろうか。初代校長は緒方知三郎先生。3年課程で卒業時に保健婦免許が交付された。これは、卒業生の話によると、GHQ主導で検討していた保健師法案を通すために、当時の厚生省厚生技官であった金子光先生(後に看護課課長、衆議院議員、日本看護協会会長)と、公衆衛生学教室の初代教授赤塚京治先生が、設置を後押ししてできた学校だった。しかし、保健師法案は廃案へ。

その結果、東京保健女子学院は、昭和26年(1951)、延べ27名の卒業生を輩出して医学部予科とともに閉校された。この間、昭和23年(1948)に保健婦助産婦看護婦法の公布、昭和24年(1949)に保健婦助産婦看護婦養成所指定規則の制定を経て、昭和25年(1950)に第1回看護婦国家試験が実施された。

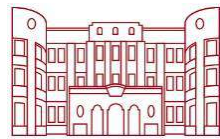
その後卒業生は、行政保健婦、研究員、保健婦養成所の教員となって公衆衛生行政の発展に寄与。僅か5年で閉校した幻の学校とはいえ、まだ「保健婦」が少なかった時代にこれだけ社会に貢献できたのは東医にとって誇るべきことではないか。

【参考文献】○東京医科大学看護専門学校 五十周年誌
○東京医科大学五十年史 ○東京医科大学七十年史



第1期生の卒業証書

※ご本人の承諾を得て掲載しております。



霞ヶ浦看護専門学校の役割

昭和37年(1962)、霞ヶ浦病院(現 茨城医療センター)では、病院の発展に伴う看護婦不足を解消するため、准看護婦の養成を始めた。当初は生徒を募集し、土浦医師会附属准看護婦学校で教育を受けさせていた。しかし昭和40年代後半になっても、茨城県土浦市や稲敷郡には、准看護婦から看護婦になるための進学課程のある学校がほとんどなく、地域医師会からの強い要望もあり、本学としても霞ヶ浦病院に勤務する准看護婦の勤務意欲の向上、看護体制の強化をはかるべく、進学課程の学校設置の必要性が検討された。

その結果、昭和50年(1975)4月、学校法人東京医科大学附属霞ヶ浦高等看護学校を開校することとなった。当初は、2年課程で定時制夜間の学校で、昼間、霞ヶ浦病院で勤務する准看護婦が、夜間に学校に通い、まさに“自主自学”の精神で、看護体制の強化を実現したのである。



霞ヶ浦高等看護学校開校祝賀式・第1回入学式(昭和50年4月)

その後学校教育法の改正に伴い、専修学校に移行。昭和53年(1978)、東京医科大学霞ヶ浦看護専門学校に改称し、あわせて夜間部を昼間定時制に変更した。昭和60年(1985)3月には、現在の校舎が竣工、5月には創立10周年を記念し、落成式も挙行され、昭和63年(1988)には、3年課程に変更された。

また当初40名でスタートした定員は、平成20年度に70名に増員、多くの優秀な看護師を輩出し、地域に貢献している。

このように霞ヶ浦看護専門学校は、地域のニーズに応えてきた地域の看護師養成学校であると同時に、大学の附属病院である「茨城医療センター」において、高度医療の運用と地域医療への貢献を推進できる看護師の養成の場という二つの役割を担っているのである。

【参考文献】○東京医科大学報 第89号
○東京医科大学霞ヶ浦病院創立50周年記念誌
○東京医科大学七十年史 ○東京医科大学八十年史

(監修: 東京医科大学図書館)



旧校舎

新校舎
(昭和60年3月竣工)